

ed., p. 25) 、またその kulaputra, -duhitr が説教師となり (p. 100) 、四衆の前で心おびえることなく語り (p. 42) 、菩薩の誓願を立てて菩薩乗にて修行し (p. 113) 、智慧パーラミターに習い学び行ずる者は菩薩大士と同様である (p. 104) とされる。そして文脈の中で、菩薩大士の語が kulaputra の語に置き換わり (p. 7) 、また逆に、しばしば kulaputra, -duhitr が菩薩大士の語に置き換わる (p. 31; pp. 104-105, etc.) 。以上の『八千頌』における特質は後の『法華経』等にも見出される]

『八千頌』における kulaputra, -duhitr は、出家をも含む点で世俗社会の「良き階層集団の男子・娘」の意味ではなく、すでに見たように、初期仏教において出家者集団に属する者に適用されたところの意味合いがここに思い起こされるべきである。『八千頌』のそれもまさに、「(その勝れた大乘の経を奉じる) 教団に所属する者」という意味合いで使用されている感が強い。その語には、世俗社会のうちでいかなる階層に属しているようにとも、同一の教団に属するという同族意識と連帯感とを含んでいることが窺われるのである。「同志、同朋、同行」の語感にも通ずるものがある。無量無数の衆生を導き利益する自利利他円満の菩薩道を行ずるという高い浄らかな同一の志を有する集団の一員であるとの深い自覚が、bodhisattva の語同様に kulaputra, -duhitr の語にも込められまた願われているように思われる。またそれゆえに、呼びかけにその語が使われるとき、自ずから敬意的表現の響きを感じさせるものになっているようである。

『阿毘達磨俱舍論』における作用の意義

日 比 佑 香

現代の科学では自然現象は様々なカテゴリーに細分化され、それぞれにおいて独自の発展を遂げているように見える。とりわけ物理学には、力学、電磁気学、熱学、素粒子学、量子力学など様々な分野がある。しかし、これらの現象は決して互いに無関係なものではない。物理学というものは、自然の中に統一的な法則を見出し、自然のありのままの姿を理解しようとする学問であるからである。物理学を統一的に理解しようとするとき、その要となるものがエネルギー (energy) である。すべての自然現象は例外なくエネルギーの与奪によって行われている。生命活動をはじめとして、太陽の光や気候、重力や風、音までも、我々の知り得るすべての自然現象がエネルギーの流れで説明され得るのである。すなわち、絶えず移り変わるエネルギーの流れを説明することが物理学の統一的な目的なのである。

説一切有部は、とりわけ人間の認識範囲内に留まるが、様々な自然現象を七十五の法 (dharma) に分類し、その全貌をこれら少数の統一的法則で理解しようとした。その教理の中にいて作用とは七十五法の中には含まれてはいないが、無為法を除く全ての法において為し得る性質である。説一切有部に依れば、三世にわたって法は存在し、作用の区別に依って過去・現在・未来が決定するのであるから、たとえば法が存在しているも

作用がなければ我々の認識する現実世界が成り立つことはないであろう。言い換えれば、全ての認識し得る自然現象は、作用の与奪によって存在するというのが言えるのである。このことにより、作用とは有為法が現在するためにはなくてはならない概念であることから、先に述べた物理学のエネルギーと似た概念に相当するのではないだろうか。

本論考では、サンスクリット原典の残存する『俱舍論』をもとに、玄奘が解釈した「作用」が現代科学にいうエネルギーと似た概念に相当するかどうかということを検討した。その結果、玄奘訳の「作用」には、(1)法体が起こりくること(AKBh. p. 13, l. 16) (2)行為を為すこと、実行すること、生ずること(AKBh. p. 28, ll. 20-21) (3)為す、行う、執行すること(AKBh. p. 31, ll. 11-13) (4)行動、仕事(AKBh. p. 60, l. 23-p. 61, l. 1) (5)差別の因を建立するもの(AKBh. p. 63, ll. 14-16) (6)因果関係を誘発するもの、(7)三世を規定するもの(AKBh. p. 296, l. 6-p. 297)といった定義があることをまとめた。

また、色法、心法、心所法、心不相応行法において作用という言葉が使われているが、無為法においては使われていなかった。

以上のことから、『俱舍論』における玄奘訳からの理解において、「作用」とは無為法を除く全ての現象において共通する性質であり、作用があるから認識世界が成り立つといった、現代物理学のエネルギーの概念に似た、極めて根幹的なものであることが分かった。

東南アジア撰述仏典の特質

茨田 通俊

東南アジア各地には、現地地撰述された上座部仏教の古写本が数多く存在する。古写本は、ヤシの葉を乾燥させた貝葉写本が一般的であるが、タイ中部地域の貝葉写本については、中心都市アユタヤが、十八世紀後半のビルマ軍の攻撃によって壊滅したために、そこに残存する写本群は皆無に等しく、一部が当時栄えた周辺地域の寺院で長く秘蔵されて来ただけで、実態はほとんど知られていなかった。

一方タイ中部地域には、サムットコーイと呼ばれる桑科の木から作られた折本紙写本も伝わっている。田辺和子博士が現地の寺院で撮影を許可された折本紙写本は、クメール文字パリー語あるいはタイ語で表記されたもので、所々に鮮やかな挿絵が描かれているのが特徴的である。(田辺和子「アユタヤ期後期からラタナコーシン期初期作成の絵付折本紙写本絵解き(仏伝中心)と経文解説」、『パリー学仏教文化学』第二十四号、二〇一〇、九三頁以降参照)。この絵入りの折本紙写本もタイに現存するものは数少なく、中でもアユタヤ期のものはごくわずかとされる。

ここでは、Mahābuddhagunavananaと称する仏徳の讃嘆に関する叙述や、アビダンマ七論への言及が多く見られる(田辺和子「アユタヤ期後期からバンコク期初期に書かれた絵入り折本紙写本の解説―クメール文字パリー語表記の仏典写